

夏の思い出

PN 生方冬馬

あらすじ

子供の頃、夏の暑い日、祖母の入れてくれた麦茶。年月は過ぎ、祖母もこの世を去った。祖母の自宅を引き払うことになった由佳は思い出のグラスを持って帰ることにする。

人
物

橋田由佳（28）会社員

橋田由佳（8）小学生

君島春子（63）由佳の祖母

高橋俊介（48）廃品回収業者

田中敬子（36）看護師

○群馬県・東吾妻町・君島家・縁側

橋田由佳（8）は縁側でチューペット
を舐めながらぼーっと空を眺めてい
る。

由佳、額に汗をかいている。

君島春子（63）がお盆に麦茶のグラ
スを乗せてやってくる。

空には入道雲。

春子「由香ちゃん、暑いでしょう」

春子、由佳の隣に膝をついて麦茶を渡
す。

由佳、手をグラスを持つ。

春子「汗かいちゃうからね。麦茶、冷たい
よ。飲んでおきなさい」

由佳「おばあちゃん、ありがとう」

春子「今日は、町内会のお祭りだね。浴衣用
意しようね」

由佳「うん。そうだね」

由佳、麦茶をぐっと飲んでグラスを返
す。

足をブラブラさせている。

由佳、祖母を見て。

由佳「おばあちゃんの麦茶、私、大好き！美味しいよね。えへへ…」

春子「それは良かった。夏は暑いからね。いっぱい飲んだよ」

由佳「うん！」

春子、笑顔で室内に入っていく。

由佳、縁側に寝転んで空を見上げる。

由佳 M「あの夏の青い空と麦茶の冷たさだけはずっとずっと記憶にこびりついていく」

○群馬県・東吾妻町・君島家・居間

T「2025年8月 祖母の家」埃だら

けの居間に橋田由佳（28）が高橋俊

介（48）と立っている。

ふたりともマスクを着用し、スリッパを履いている。

埃が舞っている。

由佳「祖母が亡くなった。身寄り私は私だけだった。葬式も納骨も全部、一人でおこなった。大変だったけど、残すはこの祖母の家の処分だけとなった」

由佳、ぐるりと室内を見渡す。

埃だらけで時間が止まったかのような室内。

由佳「認知症を患った祖母は介護施設に入った。それ以来、鍵のかかったこの家には誰もはいっていない。」

高橋、バインダーに書き込みをしながら。
ら。

高橋「それでは、家財道具は全部、処分ということでよろしいですか」

由佳「はい。祖母も亡くなりましたし。誰も住みませんから」

高橋「わかりました。処分費用の見積もりを取らせてもらいます」

由佳「よろしく願いします」

高橋、室内を見て回る。

床に足跡がつく。

由佳「5年でこんな埃だらけになるんだな」

由佳、ダイニングテーブルの上を指でなぞる。

指のあとが埃に残る。

高橋、メモを取りながら振り返って。

高橋「すみません、念の為、貴重品の有無だけ確認していただけますか？」

由佳「わかりました。まあ、残ってないですけどね」

苦笑する由佳。

由佳「祖母が施設に入るときに、大切なものは全部、確認した。残っているのはガラクタばかりだ」

由佳、リビングの引き出しを開けたり飾り棚を開けたりしている。

曇ったグラスに目が留まる。

由佳「これ…。よく麦茶いれてもらったな…」

由佳、グラスを二個手に持って振り返る。

由佳「あの、これだけ持って帰っていいですか？ 思い出の品なんです」

高橋「ええ、構いませんよ。残りは処分できませんか？」

由佳「かまいません。お願いします」

由佳、グラスを握りしめながら決意を込めて頷く。

○都内・田中ハイツ・由佳の自宅・居間

（夜）

由佳、ソファに座って一生懸命にグラスを磨いている。

照明にかざす。

由佳「安物なんだけどな。磨くとそれなりのものに見えるなー、なんて」

由佳、ローテーブルにグラスを二個並べて眺めてみる。

由佳「インスタに載せたらいいねつくかな
。。レトロ趣味ってことで」

由佳はスマホのカメラで写真を撮る。
角度を変えて何枚も取る。

カメラロールを確認する。

似たような写真がカメラロールに並んで
いる。

一枚をタップして拡大する。

由佳「うーん。しょせんは安物だなあ。どんな
角度でとっても変わらないもんだね」

由佳、キャプションに「祖母との思い出の
グラスです☆」とつけてSNSに
投稿する。

背伸びをして肩をほぐす由佳。

時計を見る。

23時5分。室温24度。

由佳「こんな時間じゃん。お風呂入ろっと」

由佳、グラスをローテーブルに置いた
まま、居間を出ていく。

○都内・田中ハイツ・由佳の自宅・居間

（朝）

パジャマ姿の由佳が頭を押さえてベッドから立ち上がる。

時計「時45分。室温35度。」

由佳「頭、痛い…。なにこれ…。暑い…」

由佳、ソファに倒れ込む。

ローテーブルにはグラスが二つとスマホ、エアコンのリモコンが置かれている。

由佳、エアコンのリモコンに手を伸ばす。

操作する。

ビツと音がするが反応しない。

由佳、手を上げてエアコンの風を確認してみる。

風は動いていない。

由佳「もしかして、エアコン壊れた…？マアジで…？」

由佳、真っ赤な顔。

苦しそう。

由佳「水…飲まない…。冷たいの…」

由佳、よろよろと歩いてキッチンにたどり着く。

キッチンにすがりついてやっと立っている。

キッチン台の上に麦茶の入ったグラスが置かれている。

一気に煽る由佳。

由佳「はあはあ…。麦茶、冷たい…」

ちよつと持ち直した由佳、冷蔵庫を開けて天然水のペットボトルをがぶ飲みする。

へたり込む。

由佳「はあはあ、これって救急車呼んだほうがいいのかな…」

由佳、よろよると立ち上がって移動。
ローテーブルに置かれていたスマホを手取る。

ローテーブルの上にグラスは乗っていない。

ソファに沈み込んでスマホを握りしめる由佳。

119番を押す。

由佳「すみません、熱中症みたいで、動けなくて」

○都内・救急病院・処置室

看護師たちが忙しく仕事をしている。

由佳、ベッドに横たわって点滴を受けている。

だいぶ、顔色が良くなっている。

田中敬子（36）が近寄ってくる。

敬子「君島さん、具合はどうですか？」

由佳「あー、だいぶ良くなってきました」。

頭も痛くないし。ありがとうございます
す」

敬子「それはよかったですね。ご家族に連絡はしましたか？」

由佳「いえ、家族はいなくて。一人暮らしなんです。」

敬子「そう。それじゃ、もう少しゆっくりしてから先生のお話聞きましょうか」

由佳「はい。」

由佳、目を閉じる。

敬子は点滴を確認して、由佳から離れていく。

由佳「朝、飲んだ麦茶。おばあちゃんの味がした。それに。」

由佳、壁に向かって寝返りをうつ。

由佳「私、麦茶なんて冷蔵庫にいられてない。おばあちゃん、助けてくれた？」

由佳、ひっそりと涙を流す。

由佳「おばあちゃん、どうして死んじゃったの。私、一人じゃん。」

由佳、声を殺しながら嗚咽を漏らす。

馬冬方生